

次の文章は、宇沢弘文著『経済学と人間の心』からの抜粋です。文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

問題 1. 下線部①「物事の本質を見抜く観察の目」とはどのようなことを指していると考えられるか。本文の内容を参考に、100字以内で述べなさい。

問題 2. 下線部②「福沢諭吉のもっていたリベラリズムの思想」とはどのような事か。本文の内容を参考に説明し、それに対するあなたの考えを加えて600字以内で述べなさい。

### 社交的な飲み物

福沢諭吉はいうまでもなく、明治の日本の生んだもっとも偉大な教育者の一人である。諭吉は、数多くのすぐれた業績、著作を残しているが、同時に、かれ自身の生き方自体を通じて、大学教育のあり方について、貴重な規範を与えている。

もうずっと昔のことになるが、福沢諭吉の日記を読んでいた、次のようなエントリーに出会った。諭吉が咸臨丸でアメリカに行く前のことである。

今日の午後、横浜の外国人居留地に行って、生まれて初めて麦酒（ビール）と称するものを飲んだ。外国人はビールを飲みながら、活発に議論をしている。まさに談論風発という感じであった。ビールというのは極めて「社交的な飲み物」だ。それに比べると、日本酒は一人さびしく飲むものである。

私はこのエントリーを読んで、諭吉のするどい、①物事の本質を見抜く観察の目に改めてつよく印象づけられたことを記憶している。ちなみに、麦酒と書いて、ビールと読ませるのは、諭吉が最初だったのではなかろうか。

諭吉の酒好きは、子どもの頃から有名だった。とくに、二十代の前半、大阪の適塾で、緒方洪庵の下で学んでいた頃、諭吉の酒好きのエピソードがいくつか伝わっている。諭吉が禁酒の宣言をしたところ、だれもまともに受け取らなかった。禁酒が容易になるといわれて煙草を始めたところ、結局一生酒と煙草を両方とも止められなくなってしまったと、諭吉は『福翁自伝』のなかで嘆いている。諭吉はまた、自分は何の欠点もないと思うが、酒を飲むことだけが欠点だと、これも『福翁自伝』

のなかで述べている。しかし、諭吉にとって酒を飲むというのは、彼のもっていたリベラリズムの思想と切り離せないものだったのではなかったかという気もする。

②福沢諭吉のもっていたリベラリズムの思想を象徴する有名なエピソードがある。諭吉が咸臨丸に乗って、初めてアメリカに渡った時のことである。じつは、諭吉はアメリカに行きたいという希望をつよくもっていたが、何のつてもなかった。そこで、幕府からアメリカに送られる使節団の正使木村摂津守の召使いに雇われて、咸臨丸に乗り込むことに成功したのである。ところが、諭吉は咸臨丸のなかの階級制のきびしさに驚き、かつ憤慨する。一般に船のなかは階級制がきびしいところであるが、使節団のなかにあった当時の日本の社会の階級制と相乗効果をともなって、咸臨丸のなかの階級制がひどいものであったことは想像に余りある。諭吉は船のなかで、二人の最下級の若い水夫と親しくなった。そして、かれらの食事があまりにもまずしく、その居住条件があまりにも悪いことを知って、同情するとともに、大いに憤激する。そのうちの一人がとうとう栄養失調と過労から病気になってしまった。諭吉が酔っ払って、このことで正使木村摂津守と大喧嘩して、馘首<sup>註)</sup>になりそうになったりしたエピソードが残っている。「天は人の上に人をつくらず、人の下に人をつくらず」という言葉は、諭吉が若い時から、常に心に留めていた言葉である。

咸臨丸がサンフランシスコに着いたとき、その若い水夫が亡くなってしまった。そこで、諭吉は一人で異郷のサンフランシスコに留まって、亡くなった若い水夫のお墓を設計し、その完成を見届けてから、使節団の一行の後を追った。それから何年かして、諭吉はふたたびアメリカに派遣された使節団に加わった。そのときは、かなりえらくなっていて自由がきく身だったので、使節団の一行から離れて一人だけサンフランシスコに寄り、亡くなった若い水夫のお墓にお参りしたという。私は、この、諭吉のエピソードを聞くたびに、アダム・スミスの『道徳感情論』を思いおこし、経済学の原点をみる思いがする。

宇沢弘文著『経済学と人間の心』（東洋経済新報社、2003）、243～246頁より抜粋

註) 馘首　かくしゅ

雇い主が使用人をやめさせること。解雇。